様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 24 日現在

機関番号：１６１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：21520017
研究課題名（和文）　風景の生態・現象学的研究―生態学的自然美学を目指して―

研究課題名（英文）　Eco-phenomenological Study on the Landscape
-Toward an Ecological Aesthetics of Nature-

研究代表者
石田　三千雄（ISHIDA　MICHIO）
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授
研究者番号：90127605

研究成果の概要（和文）：本研究は、ラヴァーターやリヒテンベルクに見られる、人間の顔からその心の状態や性格を推理する伝統的な観相学を拡張し、自然の諸事物、地域、風景に、それらを特徴づける相貌を、全体印象すなわち雰囲気として見て取る観点を明らかにしようとした。特に、アレクサンダー・フォン・フンボルトの植物観相学が、風景として現れる自然の地域の特徴を、植生に即して全体印象の下に雰囲気的に把握した、風景の生態・現象学的研究の先駆形態であることを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to extend Lavater's or Lichtenberg's traditional physiognomy that infer the state of minds or characters of human beings from their faces. It thereby, explains a viewpoint to grasp the physiognomy which characterizes things, regions and landscapes of nature as total impressions (i.e. atmosphere). Particularly I present Alexander von Humboldt's physiognomy of plants which describes the features appearing to us as landscapes on the earth in terms of Flora under the total impressions, as the prototype of eco-phenomenological study of landscapes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：風景、相貌、観相学、ラヴァーター、アレクサンダー・フォン・フンボルト

１．研究開始当初の背景

(1)この研究はまず私のフッサールの相互主観性についての研究(『フッサール相互主観性の研究』ナカニシヤ出版、平成 19 年)を発展させる応用的研究という側面をもつ。私はこの本でフッサール、テオドール・リップス、エルンスト・カッシーラー、マックス・シェーラー、ヘルマン・シュミッツ等に依拠して、人間の間に成り立つ相互主観性を論じたが、この相互主観性はさらに感情という形で周

囲環境や自然の事物にも及ぶものであることがこの研究から予想された。リップスはそのことを『美学』の第一巻の第二篇「人間と自然事物」の中で「自然に対する感情移入」ということですでに一部論じていた。この研究方向の一部は、すでに「モーリッツ・ガイガーにおける感情性格概念について」(広島大学応用倫理学プロジェクトセンター研究成果報告書『ぷらくしす』第９号、2007 年)の中で論じた。ミュンヘン現象学派に属するモーリッツ・ガイガーはすでに色や風景に、主観の感情体験に対応する「感情性格」が見て取られることを明らかにしていた。これはシュミッツやゲルノート・ベーメの感情論の先駆と見なすことができると私は論じた。この研究成果を風景論や風景画論として発展させようと私は意図した。

(2)本研究の主要な学術的背景には、シュミッツや G.ベーメの「新しい現象学」の研究動向がある。新しい現象学は、フッサール以後の現象学の研究動向であり、科学との対話および諸々の現象(身体、感情、雰囲気等)に関する学際的研究に特徴がある。またギブソン等の生態学的知覚論は、アフォーダンスという概念を心理学に新たに持ち込み心理学に新たな研究方向を切り開いている。本研究はこれらの動向に対して、生態・現象学的な観点並びに美学的観点で、感情としての雰囲気に注目して風景の研究を行うものであった。環境や風景や建築を扱う現象学の応用研究としての「現象学的エコロジー」や「生態現象学」(Eco-Phenomenology)の研究のうちにも、この研究は位置づけられる。さらにこの研究は広く美学的な研究の中にも位置づけられる。美学を G.ベーメのように「感覚学としての美学」として再構築するならば、環境美学や自然美学として新たな研究分野を開拓することができる。この研究は、感情としての雰囲気を論じるに当たって、感情が人間の身体の特徴、特に顔(一般的には相貌)に関わる点に特に注目し、観相学を掘り起こし、これを感情としての雰囲気の中に統合すべく、G.ベーメが行っているように現代的に再解釈しようとしたものである。感情としての雰囲気を重要な手がかりとして、人間と風景との関わりを現象学的に明らかにしようとすることがこの研究の目指すところであった。

２．研究の目的

(1)本研究の目的は、現象学的な感情論(雰囲気の理論)および生態学的知覚論を基盤にして風景の存立構造を論じることにあった。すなわち、本研究は、生きられ、感じられ、享受される環境や自然を、ヘルマン・シュミッツや G.ベーメ等の現象学的な感情論やジェームズ・ジェローム・ギブソンやエドワード・S・リード等の生態学的知覚論を基盤にして、生態・現象学的並びに美学的に明らかにしようとした。この全体構想の中で、本研究は特に風景に焦点を絞って、風景を生態・現象学的にならびに美学的に研究することを目指した。環境や自然は単に自然科学によって数量的に研究されるものではなく、まずもって人間にとって感じられ、生きられ、享受されるものである。この生きられ、感じられ、享受される環境や自然を、特に風景として、その存立構造を明らかにすることに本研究の目的はあった。この研究に「生態・現象学的」という言葉を用いたのは、人間の知覚はまず第一に物を客観的に捉えるのではなく、人間の知覚体験自身を反省してみるならば、人間が環境のうちに生きることによって、環境から支えられながら、環境から多くのものを提供されていることが知覚によって示されるからである。またこの研究が美学的側面をもつのは、私が美学に新たな学の可能性を見るからである。美学はその学本来の意味で「感覚的認識の理論」として、芸術・環境・自然を包括的に扱う理論として再構成される必要がある。G.ベーメは現象学的な立場から「感覚学としての美学」を、生態学的な自然美学として構想しており、本研究は G.ベーメの研究に多くを負うものである。

(2)風景を生態・現象学的ならびに美学的に研究するに際して、本研究は風景を相貌[観相]として捉える観点をとった。風景の相貌は、ゲーテからアレクサンダー・フォン・フンボルト、ロマン主義の自然研究者を経て、現代の地理学者に至るまで主題化されてきたテーマである。このために、私は、G.ベーメに従って、ラヴァーターに代表される伝統的観相学の革新を企て、それをアレクサンダー・フォン・フンボルトの「植物観相学」の構想につなげようとした。というのは、アレクサンダー・フォン・フンボルトの「植物観相学」は、風景の存立構造を生態・現象学的に研究した、先駆的研究、一つのモデルケースと見なされるからである。フンボルトの植物観相学は、ラヴァーターに代表される観相学の伝統を引き継ぎ、それを独自に展開させたものであり、風景論に大きな示唆を与えるものであった。フンボルトの植物観相学は、広く自然の観相学、風景観相学として構想されていた。フンボルトの植物観相学は、植物がわれわれのうちに生み出す感情、印象に関して、植物の現象形態を取り扱うものであった。フンボルトが観相学について語るとき、人間が感性的に情動に襲われていることを感覚する、風景の全体印象が問題となっていた。フンボルトにとって、植物観相学において生じるものは、植物の生育様式の類型学であった。ゲーテの原植物というただ一つの類型の代わりに、16(または 17)の根本型が問われた。

フンボルトの風景観相学としての植物観相学において問題となっているのは、個々の有機的存在者においてわれわれが個々の特定の相貌を認識するように、地球上のあらゆる地方にもっぱら帰属する、何らかの自然の相貌であった。

３．研究の方法

(1)主として文献を利用し、観相学的・応用現象学的な研究を行った。その際、ゲルノート・ベーメの雰囲気の現象学の研究手法を参考とした。本研究が取り扱ったのは、自然の相貌としての風景である。風景が、或る地方の独自の視覚像[相貌]、その表現価値ないし性格をもつということを、雰囲気を手がかりとして、この研究で明らかにした。雰囲気はシュミッツやG.ベーメが現象学的な分析や記述の際に多用する鍵となる概念である。雰囲気は単に人間が抱く主観的感情であるだけでなく、客観の側にも雰囲気的なものとして認められるものである。否、主観・客観に分裂して捉えられずに空間に溢れ出ているものである。これが風景を解明するのに概念装置として大いに役立った。そこでアレクサンダー・フォン・フンボルトの植物観相学に即して、風景が、或る地方の独自の視覚像[相貌]、その表現価値ないし性格をもつということを、全体印象としての雰囲気を手がかりとして研究した。この研究では明示的に現象学的記述を行うまでにはいかなかったが、生態・現象学的な観点で研究をおこなった。

(2)私はまずラヴァーター観相学をあらゆる自然物の相貌を読み取る観相学、つまり自然の観相学へと拡張する方法をとった。ラヴァーター観相学は、人間の外面的なものを通じて、彼の内面的なものを認識する技あるいは学である。しかし、ラヴァーター観相学には、人間を神の似姿(像)と見なすキリスト教の背景があった。人間の顔には、神のアルファベットの文字が記されており、この自然の言語を読み解くことが観相学の研究・実践だとされた。私はG.ベーメの示唆に従って、この観相学を、神学的前提から切り離し、自然の諸事物を扱う観相学へと拡張することを試みた。神学的前提と切り離される限り、観相上の諸特徴は、内に隠されている性格を表す記号ではなくなり、内的なものの直接的現れであることになる。またラヴァーター観相学には、人間の個性、人間の顔の全体の印象を把握する視点も含まれていた。これを積極的に評価することにより観相学を、「現れているかぎりでの外的なもの」から、人あるいは事物の雰囲気的な特徴、全体的な印象による個性を把握する学として構想する道が開かれた。このように拡張された観相学は、G.ベーメによれば、「或るもの、すなわち性格特徴の観相と、それによって規定される雰囲気との間の関係」に関わる学となった。相貌は、G.ベーメの言うように、「現出における性格」を感知可能にさせる産出者である。こうして観相学は「外的なものから内的なもの」を推理する学としてではなく、「現れている限りでの外的なもの」から、人あるいは事物の雰囲気的な特徴、全体的な印象による個性を把握する学として再構成されることになった。そこから観相学を、自然の事物の相貌を把握し、記述する学として拡張する可能性が開かれた。

(3)こうした拡張された観相学の例として、アレクサンダー・フォン・フンボルトの植物観相学が挙げられる。フンボルトの植物観相学は、ラヴァーターやリヒテンベルクに見られる、人間の顔からその心を読み取る観相学の伝統の延長上にあり、またその独自の拡張である。この研究を通じて、私は「風景観相学」は、アレクサンダー・フォン・フンボルトでは、自然の観相学としての「植物観相学」として構想されたことを明らかにした。フンボルトの自然の観相学としての植物観相学は、人間に対して現れている自然を、いわば大地の顔、相貌として捉えるものであった。その際、地球は、フンボルトにとって、植物相や植生という形態を取る植物被覆として地域ごとにさまざまの相貌を呈した。フンボルトの植物観相学は、地球の地域の特徴を植生から明らかにするものであり、植生を形態として記述し、またその美の享受を論じるものであった。フンボルトの自然の研究は自然の享受と一体であった。自然享受は特に植物が大きな役割を果たす風景においてなされる。フンボルトは、地方がもつ「個性的性格」を明らかにしようとし、これは地球表面の相貌的な形態から得られると考えた。この研究で、私は風景を、地球上の自然がそれぞれの地域において人間に見せるさまざまの相貌—その際人間は全体印象の下に、雰囲気的にその相貌を捉え同時に享受する—として明らかにしようとした。

４．研究成果

本研究は、現象学的な感情論(雰囲気の理論)および生態学的知覚論を基盤にして風景の存立構造を論じることにあった。その際、ジェームズ・ジェローム・ギブソンやエドワード・S・リード等の生態学的知覚論も援用する予定であったが、時間的制約のために実際はこの研究では活用できなかった。しかし、G.ベーメの示唆による、ラヴァーター観相学の拡張による観相学の革新によって、風景を扱うアレクサンダー・フォン・フンボルトの植物観相学としての自然の観相学を論じるなかで、生態学的な観点からの研究は実施することができた。

(1)この研究成果の一つは、内外のドイツ文

学の研究者の間で行われてきた観相学の研究を哲学の研究者として行うことができたことである。国外では、哲学的研究としてG.ベーメはすでに観相学の革新について重要な研究を行ってきた。私の研究はそれを受け継ぐものである。観相学の研究成果として私はまず、2010 年に日本シェリング協会で「ラヴァーターにおける顔の記号学―ラヴァーター観相学の背景とその射程―」という発表を行った。この発表は後に、同名の論文として『シェリング年報』(19 巻、2011 年)に掲載された。この論文で、ラヴァーター観相学を神学的前提から解放して、観相学の革新として、新たな記号学および解釈学として解釈できる可能性を論じた。またこの論文と関連する研究成果としては、「ラヴァーター観相学の構想とその問題点」(徳島大学総合科学部人間社会文化研究、第 18 号、2010 年)がある。これは『シェリング年報』掲載の論文では扱えなかったリヒテンベルクとの対比も含めた、より詳しいラヴァーター観相学の特徴とその問題点を論じた研究となっている。

(2)フンボルトの植物観相学に関する成果は、「アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける植物観相学について」(徳島大学総合科学部人間社会文化、第 19 巻、2011 年)である。この論文で、人間に対して現れている自然が、フンボルトにおいて、自然(大地＝地球)の顔、相貌として捉えられていることを論じた。大地はフンボルトにとって、植物相や植生という形態を取る植物被覆として地域ごとに類型化されて現れる。風景として現れる自然の地域の特徴を、植生に即して全体的印象の下に雰囲気的に把握し、またその美を享受する視点が、風景の現象学的・生態学的研究の先駆形態であることを示すことができた。

(3)また本研究と密接に関連し、広島大学応用倫理学プロジェクト研究センターを中心とする「和解」をテーマとした科研とも関連した研究成果は、論文「自然との和解とは何を意味するのか―自然倫理学の根拠づけの試み―」(ぷらくしす、2011 年度)となった。この論文は、クラウス・マイヤー＝アービッヒの著書『自然との和解への道』で述べられている、「自然との和解」が何を意味するかを自然倫理学の根拠づけの試みとして論じたものである。この中で、アレクサンダー・フォン・フンボルトのコスモスとしての自然という論点が重要な役割を果たすことを論じた。マイヤー＝アービッヒは、人間を自然の中に位置づけて、きわめて広い視野から現代における自然哲学を構想している。この現代的な自然哲学(実践的自然哲学)を基盤として、新たな自然倫理学は構築されることを私は論じた。アービッヒのいう「自然との和解」は、最終的に自然の法共同体の構築において実現される。自然の法共同体は、コスモス内での地球上で、人類が法の支配を行使できる規模で打ち立てられることを論じた。今後は風景論からさらに広く自然美学や自然倫理学を経て、自然哲学の研究を目指すつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1. 石田三千雄、自然との和解とは何を意味するのか―自然倫理学の根拠づけの試み―、ぷらくしす、査読無、2012、p.125-138
2. 石田三千雄、アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける植物観相学について、徳島大学総合科学部人間社会文化研究、査読無、Vol.19、2011、p.1-16
3. 石田三千雄、ラヴァーターにおける顔の記号学―ラヴァーター観相学の背景とその射程―、シェリング年報、査読有、Vol.19、2011、p.120-128
4. 石田三千雄、ラヴァーター観相学の構想とその問題点、徳島大学総合科学部人間社会文化研究、査読無、Vol.18、2010、p.97-112

〔学会発表〕（計 1 件）

1. 石田三千雄「ラヴァーターにおける顔の記号学―ラヴァーター観相学の背景とその射程―」、日本シェリング協会、2010.7.3(神奈川大学横浜キャンパス)

６．研究組織

(1)研究代表者

石田　三千雄（ISHIDA　MICHIO）
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授
研究者番号：90127605

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：